

特別支援教育実践研究会 第8回実践研究発表会

開催日時：令和2年2月24日(月・振) 13:00~15:00

於：上越教育大学特別支援教育実践研究センター

特別支援教育に関する情報の共有と発信を図ることを目的として、特別支援教育実践研究会を設立し、会員が教育課程編成や学校現場・センター等における指導実践とその成果等を発表する場として、第8回実践研究発表会を開催した。10件のポスター形式による発表が行われ、本学院生・教員等の69名が参加した。

発表要旨

発表1

題目：ADHD児に対する自己調整学習モデルに基づく作文指導に関する事例的研究

発表者：早瀬雄太・黒川健太郎・鈴木地平・中川未森・小林圭介・馬場詠万・小林航平・八島猛（上越教育大学）

要旨：作文を書くことに困難を示す発達障害児は少なからず存在する。近年、自己調整学習モデルを用いた教授法が注目されているが、ADHD児に対する作文指導に関する教育実践は少ない。そこで本研究は、ADHDのある1児童を対象に、自己調整学習モデルに基づいた指導を行い、その効果を検証した。その結果、作文の要素数と作文内容の質的評価において高い指導効果が認められた。また、指導後には自発的に日記を書く様子が見られた。

発表2

題目：動作法を参考とした肢体不自由臨床実習成果報告

発表者：安田浩士・佐々木壮太・佐藤みどり（上越教育大学）

要旨：2年間の肢体不自由臨床実習の中で、トレーナー3人がそれぞれのトレーニーに対し、動作法を参考に訓練を行った。その中で実態把握から目標設定を行い、見直し改善を行うことで、多様な指導や支援の知見を得ることができた。その学びを活かし、初見のトレーニーに対して、実態把握後、動作法を参考に訓練を行った。訓練を行った結果、クラッチを用いた歩行時の姿勢の改善がみられた。

発表3

題目：知的障害教育臨床実習

発表者：久保田雅貴・佐久間晶子・宮崎美樹・吉垣内美穂・新谷英明・岩船夏海・酒井望有・渡邊純子（上越教育大学）

要旨：知的障害やASDを伴う知的障害のある就学前の幼児を対象に、週1回の臨床実習を実施した。子どものねらいは、共同的な学習や仲間とのやりとり体験やスキル形成を通して就学を見据えた力の育成とした。受講

者は、子どもの行動理解、指導計画の作成、指導と評価に関する基礎的な技術と実践的な指導力の習得を目指した。子ども一人ひとりの実態に応じた個別指導と、仲間同士のやりとりを含む小集団指導を実施した成果を報告する。

発表4

題目：特別支援学校のセンター的機能による小学校国語科の授業づくり

発表者：高地朋見（上越教育大学）

要旨：小学校学習指導要領では、各教科等の学びの過程において考えられる困難さに対する指導の工夫の意図、手立てを明確にすることが求められている（文部科学省,2017）。本実践では、センター的機能を視点として、外部支援者が通常学級教師と国語の授業作りを行い、通常学級教師の知識領域（吉崎,1988）の変化について検討した。児童の実態を踏まえた授業作りは、通常学級教師の生徒についての知識を高め、教材内容についての知識を深めることができたと考えられた。

発表5

題目：聴覚障害幼児を対象とした「友達とかかわる力」の育成を目指した指導実践

発表者：上平昭宏・大谷泰樹・坂口嘉菜（上越教育大学）

要旨：特別支援学校（聴覚障害）幼稚部に在籍する3歳児2名と5歳児1名の「健康」の活動に通年参加した。1~2学期にかけては、3名で一緒に活動することが難しく、個々の活動になる様子が見られた。「友達とかかわる力」の育成を目指し、相手を意識する必要がある活動を考案し、指導の中では順番などのルールを守って楽しめるよう支援した。実践の中ではルールを守り相手にゆずる様子や子ども同士のボールの受け渡しなどが見られた。

発表6

題目：小学校におけるワーキングメモリを視点にした校内研究の推進

発表者：遠田敦（上越教育大学）

要旨：小学校にはワーキングメモリに課題があり、一度に複数の指示を聞くことが苦手な児童が多くいる。聞く努力をしている子を注意してその子の自己肯定感を下げのではなく、集中して聞き、課題をやり遂げ、満足できるように私たち教師が「困った子ども」から「困っている子ども」へと「見方・支援」を変えていきたい。本研究では、学習指導案の中にワーキングメモリへの配慮（支援の根拠）を記し、どの子も授業に参加し「やることがわかる」環境を整えた。その結果、教師の主體的な授業改善や支援に対する意識の変化がみられた。

発表7

題 目：発達障害特性のある児童生徒の話し合い活動の支援
発表者：高木梨子・佐藤昌史・堀井優希・原崇史・茂原伸也・池田吉史（上越教育大学）
要 旨：発達障害特性のある児童生徒5名を対象とした話し合い活動の支援に関する実践報告を行う。話し合いのテーマは年末に開催されたお楽しみ会の発表内容についてであり、自分の意見を整理する前半の個別指導と話し合いをする後半の小集団指導で構成される活動を計7回実施した。共通の目的に向かって仲間と話し合いをしながら、自分の気持ちを表現して受け入れられる経験や、相手の考えを受け入れる経験を積むことを指導目標とした。

ラーメン屋さんなどお店屋さんの形式を用いて実践した。数量概念とは、ここでは、数詞を事物に変換することを指している。実践の結果、7までは正しく変換できるが、8以上になると正しく変換できなくなることが分かった。また、お店屋さんの形式にしたことで、活動への持続的な取組が促された。

発表8

題 目：授業場面におけるMT・ST間の情報発信・受信について
発表者：横田恵（上越教育大学）
要 旨：授業における教師の適切な意思決定に基づく臨機応変な態度を考えることは、授業の流れを予測することに繋がる（吉崎，1988）。本事例では、ティームティーチング（TT）における各授業者（MT・ST）の意思決定及び個別への働きかけの手立てを考え実践する過程について、実態把握、情報発信・受信、各授業者の役割から考察した。抽出場面は20XX年X月X日の実施授業の一部である。結果、TTにおける各授業者の役割の不明確さが表れた。それぞれの役割認知に基づくスムーズな情報発信・受信の場を設けることが課題となった。

発表9

題 目：知的障害特別支援学校に在籍する自閉スペクトラム症児童に対する支援
発表者：岩本佳世（上越教育大学）
要 旨：上越教育大学特別支援教育実践研究センターの教育相談の事例報告を行う。本事例は、発表者がコンサルタントとなり、地域の知的障害特別支援学校に出向いて、担任教師に支援案を提案して介入を行っている。対象児は、知的障害特別支援学校小学部の1年に在籍し、医療機関で自閉スペクトラム症の診断を受けている女児1名である。本発表では、これまでの支援効果と今後の課題を整理することを目的とする。本事例の発表については、校長、担任教師、保護者からの同意を得ている。

発表10

題 目：知的障害児を対象としたロールプレイによる数量概念の支援－ワーキングメモリに着目して－
発表者：井上和紀（新潟市立漆山小学校）
要 旨：小学校知的障害特別支援学級で、数量概念を獲得させていくための支援方法を検討することを目的とし、